

---

2人

タイム

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

2人

### 【Nコード】

N2264V

### 【作者名】

タイム

### 【あらすじ】

この物語は、快斗君が小さくなっちゃいます。

「はあっ・・・はあっ・・・はあっ・・・はあっ・・・はあっ・・・」

だぶだぶの服に子供には似合わない表情

周りの大人に注目されながらも一心不乱に走っている

まるで、誰かから逃げながらどこかを目指してるように

その子供に1人の子供が近づく

「ねえ・・・」

その子の顔を見るなり、ハッと身を固くし立ち止まる子供

「もしかして、道に迷った？それとも・・・」

訝しがるようにジッとと走っていた子供をみながら慎重に聞く

「それとも、縮んだりする？」

ビクッと体を痙攣させ、相手を凝視する

そして、あきらめたかのようにコクッと頷く

相手は、やっぱりと言うように勝ち誇る

「じゃあ、着いて来て」

「そついい、手を引いて歩き出す」

「名前は？」

「俺は黒羽快斗。江古他高校の2年生。何で縮んだかは、阿笠って  
いう博士のところで話すから」

「そつ言うと、相手は驚いたように快斗を見る」

「何でしつてんだ？」

「そのことも、後で話すからと」

「じゃ、俺は江戸川コナン。本名は……」

「工藤新一、だろ？」

「!!!!な、何で？」

「それも、話すつて！」

「何なんだ……お前」

「さあな？」

「まあいいや……着いたぞ」

ピンポン

「こんな遅くに何の用？」

ガチャツという音と共にクールな女の子が顔を出す

「色々あつてな・・・」

「あら、その子どうしたのかしら？」

「小さくなつたんだってさ」

「はあっ!?!?・・・そんな事そんなに軽く言つて?普通」

「まあまあ・・・色々話すんだろ?快斗？」

「ああ・・・全部話すからよ、俺の正体も」

ある博士の家に双子のような男の子が2人、クールな女の子が1人、  
恰幅の良い大人が1人

「最初は俺の正体から・・・」

双子もどきの片割れ、快斗が話し出す

「さつき、新一には言ったんだけど俺は黒羽快斗。高校2年生。で、  
何で俺が狙われたのかという・・・」

「えっと、俺怪盗キッドなんだ。本当だぜ・・・信じてくれるよな  
？」

「あつたりめーだろ？そんなに真剣に言ってるのに信じないヤツが  
あるか？」

「サンキュー！で、何でなったのかというと・・・」

快斗がキッドになっただいきさつ、パンドラのこと、父のこと、e t c

「そう・・・そういうことだったのね・・・」

「なあ・・・灰原さん？スネイクって聞いたことあるか？」

「いえ・・・聞いたことはあるかもしれないけれど、覚えていない  
わ」

「そっか・・・」

「な、なあ？快斗の設定は何になるんだ？」

突発的にコナンが聞く

「そうね・・・貴方の双子の弟にしたら？貴方たち赤の他人とは思えないほど似てるしね」

「え〜マジかよ〜!!」

「あ、俺はオツケー」

コナンの批判と快斗の賛成

果たして、哀は・・・

「じゃあ、決まりね。明日紹介しにいき行きなさい」

「ほ〜い!!--」

「ちよ、俺の意見は・・・」

「じゃあ、決まりじゃな」

「お〜い・・・」



次の日・・・

「コナン君、おはようー!」

「おはよ〜・・・」

コナンが寝ぼけ眼で出てくる

「ね、何か話があるって昨日言ってたけど何？」

「あ。あのね、僕の双子の弟と一緒に住みたい!って言い出してここに来ちゃったんだけど・・・」

「ええ!コナン君双子だったの?」

「あ、うんそう。でさ、アイツも一緒にいい?」

「全然いいわよ!お父さんもいいわよね?」

「え?何がだ?」

「だーかーらー!!!コナン君の弟もここに来ても良いでしょ?ってこと!」

「はあ?ダメだダメだ!ダメに決まってるだろ?」

「・・・今、何て言った？」

蘭がニツコリと言う

「げっ・・・はい、いいです・・・」

娘の本性を知る父は縮こまる

「それで、オツケー・・・コナン君いって！」

「ありがとう！」

「楽しみねえ双子ってことはすごい似てるのよね！」

「うん！（赤の他人だけだな）」

その時、プルルルルという音と共に電話がかかってくる

「もしもし？」

『あ、新一か？』

「ああ・・・あ、あんまり大声で名前出すなよ」

『はいはい・・・で？オツケーだったか？』

「全然大丈夫みただぜ」

『ホントか！？じゃ、早速行くねー！』

「おい！いくらなんでも早すぎるだろ！」

『いってきまゝす！ガチャッ』

「……………ブチッ」

「どうしたの？」

蘭が不思議そうに聞いてくる

「アイツにオツケーだって伝えたら、よっしゃあとか何とか言っ  
てもう来るらしいよ……………」

「ええっ！？早くない？」

「僕もそう思う……………」

「コナン君と同じで無茶な子なのね……………」

「ははははは……………」

コンコンコン

ドアをノックする音が聞こえた

「はい」

蘭がドアを開けに行く

「おはようございます！えっと、あ！コナン！」

「よっ・・・あ、蘭姉ちゃんコイツは俺の弟で名前は・・・」

(げっ名前決めてないぜ)

「な、騎士ナイトです！江戸川騎士・・・」

「あら・・・コナン君と同じで変な名前ねえ。私は毛利蘭。よろしくね！」

ニコツと笑う

「それで、あそこの人が毛利小五郎。私のお父さんよ」

「ふうん、よろしくお願いします」

#### 4 (前書き)

なーんか騎士って名前気に入った

騎士が来てから3日

小五郎が出かけている間に1つの電話が来た

ブルルルルル…ブルルルルル…

「あれ？お父さんいないの？」

もうしょうがないな…！といいながら蘭が「もしもし、毛利探偵事務所です」と電話に対応する

「あのおつ！毛利さんをお願いしたいことがあるんですけど…」

意外にも電話口から聞こえてきたのは、蘭と同じくらいの少女の声であった

「はい、なんでもいいですよ」

「えっと、4日前から幼馴染の男の子がいなくなっちゃったんです！私のお父さん警察だから頼んでいるんですけど、見つからなくて…それで、今有名な毛利さんに頼もうと思って。」

「（私と一緒にだな…）わかりました！後で父に伝えておきます。」

「あと、その…見つかるまでつまり、あの、そこに住まわせてもら

えないでしょうか？父にもあつちがいいって言うならって言われたし…どうしても見つけたいんです！手伝いとかならちゃんとやるし、料理もそこそこ出来るんです。お願いします…！」

「それは、父に言わなきゃいけないけど…私が良いって絶対言わせるのでオッケーですよ！」

「ホントですか！？ありがとうございます…！あの、私中森青子といます。江古田高校の2年生です。」

「高校2年生？わあ、私と同じだ！私は毛利蘭です。帝丹高校なんだ。どうせ、一緒に住むことになるんだから、よろしくね！」

「はい！宜しくお願いします！」

「じゃあ、明日位にくる？」

「9時くらいに行きます！荷物ももう持って行っていいんですか？」

「ええ！じゃあ、また明日！」

「ありがとうございます…！」

ガチャッと電話を置く

そして、蘭は小五郎に電話を始める

電話で説明したところ、ものすごい勢いで断られた

それにきれた蘭は…

バァアンツッ!!

近くにあった壁に拳を叩き付ける

「いいわよね?」

有無を言わせない声で言う

「はい…」

ガチャッ

「「ただいま!」」

丁度良いところに2人が帰ってきた

「あ、コナン君と騎士君!あのね、良いお知らせ!明日、また人が増えるよ」

「え!大丈夫なの?」

コナンが心配そうに聞く

「うん!私のベッドで寝ればいいし…」

「てことは、女?」

「そう!中森青子っていう子なんだ…」

その時騎士が叫び声をあげる

「中森青子だとおおおおお!!?!?!?!?」

「ど、どうしたの?」

「な、なんでもない…」

騎士の顔は焦りと驚きに満ちた顔だ

「そう? まあいいわ。明日来るから、ちゃんと迎えるのよ? なんか幼馴染が居なくなっちゃって凄いショック受けているみたいだし…」

「グエ…」

騎士が声にならないうめき声をあげる

「「??.??.?」

「ま、まあ私と同じような境遇だし仲よくしなきゃ!」

喜びに満ちた蘭と焦る騎士、そして不思議そうなコナンであった…

……………

ピンポーン

探偵事務所に呼び鈴の音が鳴り響く

「あ、来た!」

蘭が嬉しそうに言いながらドアを開ける

「初めまして!中森青子です」

可愛らしい女の子がペコンと頭を下げながら入ってきた

「毛利蘭です!よろしくね!それで、あそこの人が毛利小五郎!そ  
つちの眼鏡を掛けている方が江戸川コナン君で掛けていない方が江  
戸川騎士君」

「へえ!よろしくね!」

「よろしくね!青子姉ちゃん」

コナンがいつものように可愛らしく言う

「よ、よろしく!青子姉ちゃん!」

騎士はと言つとビクビクしながら小さな声で言う

「あれ?この子!」

騎士を見つめながら突如青子が声を上げる

「騎士君って・・・快斗の小っちゃい頃に似てて、可愛い〜!!!」  
そう言い、抱きしめる

(ぎえええっっ!あ、青子〜!!)

内心でめちゃくちゃ慌てる騎士

「あ、そうだ!探してほしい人の話しなきゃいけないだった!」

「お父さん!ちゃんと聞きなさいよ!」

「わぁーってるって!」

「探してほしいっていうのは、青子の幼馴染で黒羽快斗っていうんだけど・・・あ、そうだ!写真持ってるんだった」

いそいそと鞆の中から写真を取り出す

「ほら!この人なんだけど・・・」

「うそお〜・・・新一にすごい似てる・・・」

「新一ってだれ?」

「私の幼馴染。黒羽快斗君と一緒に行方不明なんだよね〜あ、私も写真持ってるよ!」

そういいながら取り出す

「うわあ〜快斗とすっごい似てる〜!!」

「でしょ〜？私もビックリしちゃった！」

「そお？」

「そんなに似てる？」

「ナンと騎士が不機嫌そうに聞く

「似てるわよ！」

「僕には蘭姉ちゃんと青子姉ちゃんのほうが似てると思うけど」

「僕もそう思うけど」

「おじさんもそう思うよね？」

「ナンが可愛らしく小五郎に聞く

「ん？俺はどっちもどっちだと思っが・・・」

「ま、まあこの話はまた・・・」

本当にしなければいけない話を思い出して蘭が遮った

「そうだった！あのね・・・んとほら！この前キッドの予告あった

でしょ？その日から居なくなっちゃったの！学校に来ても居ないし、家にも居なくなっちゃって・・・それで、青子心配になっちゃって・・・」

さっきの調子とは裏腹にしょんぼり言う青子

いたたまれなくなった騎士がそうっと出て行くとする

「何してんだ？騎士・・・」

コナンが不思議そうに尋ねる

「いやあ・・・ちょっと、アハハハハ・・・」

気付かれた騎士はため息とともに戻ってくる

「お父さんが警察だから、調べてもらってるんだけど見つからなくて・・・」

「連絡もないの？」

「うん・・・どうしたのかなあ・・・」

(ゲツ・・・電話するの忘れてた・・・えっと、携帯携帯・・・あ！あん時に落としちゃったのか！ヤッベーな・・・)

「私と同じような感じだね・・・」

「え？蘭ちゃんもそんな感じなの？」

「うん…突然居なくなっちゃって、会えても3ヶ月に1回程度。会ったとしてもいつの間にか居なくなっちゃうし…」

「そっか…」

その会話を聞いている騎士とコナンは後ろでコソコソと話している

「な、なあ…外に出ねえーか？」

「…同感」

自分たちの話にいたたまれなくなり、外に出たくなった

「どうしたの？コナン君たち」

外に出ようとするコナンたちに不思議そうに聞く

「ちょっと、外に出たくなってね…」

「そ、そうなんだ…アハハハ」

「分かった…」

ガチャッ

「「はあ……………」」

2人同時にため息をつく



青子が来て2週間。

大分生活に慣れ、仲良く5人で暮らし始めた頃・・・

事態を揺るがす事件が起きたのだった・・・

それは、ある日の午後。

小学校2人組は休み、高校2人組は午前中授業であった。

少年探偵団は午後から遊びに来るといつていたので、つまり午前中は暇であった。

ここから事件は始まる・・・

高校から帰ってきた2人がたわなない話をしながら家の前まで来た。

入ろうとすると、中から声が聞こえてきた。

『あーつまんねー』

『同感だ・・・』

「ね、話聞いてみちやわない？」

「そだね・・・いけないけどコナン君たちよくやってるし、いいよね  
」！」

コソコソ話し、ドアに耳をつけて盗み聞き。

『なんかしよーぜ・・・』

『何すんだよ・・・何も無いぜ？』

『それを考えるんだよ』

『めんどくせー』

『やることねーんだから良いだろ？』

『ほいほい』

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

『何か思いつけよ』

『お前こそ思いつけ』

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

『なあお前さ！中身高校生でIQ400の怪盗キッドである黒羽快

斗だろ！？そーゆーの思いつくの簡単だろ！』

『なんでんなこと知ってたんだよ・・・それにお前こそ、ライバル 迷宮無しの名探偵で俺様の唯一の好敵手である工藤新一だろ！？』

『うつせーな！』

『お前こそつるさいんだよ！』

ガチャ・・・ドンッ

「「「きちゃっ」

「「「えっ・・・マジ・・・？」

7 (前書き)

” . . . . ” がなすける回です W

「 ..... 」  
「 ..... 」  
「 ..... 」  
「 ..... 」

双方とも黙り込む。

沈黙の時間が延々と続く。

ポツツと蘭が言い始めた。

「 ..... ホントに新一と ..... 」

「快斗なの？ ..... それに、快斗が怪盗キッドってどづいづいと？ ..... 」

そしてキツとそれぞれの相手の顔を覚悟した顔で見つめる。

「 ..... 」  
「 ..... 」

「 ..... ねえ、答えてよ ..... 」

「……そ、そんなわけないよ！」

「……そうそう！……いくらなんでも僕たちが新一兄ちゃんと快斗兄ちゃんっていうのは……」

冷や汗をかきながら、一応の否定をする。

「……もう、騙さないで……否定されても、もう信じられないよ……」

「……そう、だよ……今思えば貴方たちがやってきたこと……小学1年生とは思えないことばかり……」

「……学園祭のときの”コナン君”は雰囲気違ったし……」

「……この前見せてくれたマジック……”快斗”とおんなじだったよ……」

「それにつ……コナン君の顔、新一の小さい頃と似すぎてるしっ！」

「騎士君だって……快斗とすっごく似てるよ」

「私たちは……もう、聞いちゃったんだよ……？」

「話してくれても……いいじゃん……」

「……」

.....「」

男2人は沈黙を決め込んだようだ。

「話してくれないなら.....」

「腕ずくで.....」

蘭は空手の用意。

青子はモップを振り上げる。

どンドン2人は窓のあるほうへ追いやられる。

その時、

「よぉ〜！くどっ.....やのうてボウズ!!」

「蘭ちゃん、久しぶりやな〜.....何しとるん?」

いきなりあの関西2人組が入ってくる。

ポカンとしていた4人だが、いきなり蘭が振り向いて言う。

「そうよ!いつつもいつつも服部君、工藤って呼んでる!」

「ゲッ.....」

コナンが服部の方をジッと睨むと、何や?とでもいう風に不思議そうに返ってきた。

そして次は外から・・・

「コナンくん！！騎士くん！！あ・そ・ぼ〜」

歩美の声が聞こえてきた。

「・・・学園祭のときのコナン君は、哀ちゃんだったのかも・・・」

コナンが快斗に目配せする。

手で丸を作り、ニヤツと笑う騎士。

「何、するの？」

すると、いきなり後ろの窓が開いているところへクルツと後ろ向きに回転して2階の窓から飛び降りた。

「コナン君っ!?!」

和葉が叫ぶ。

「青子ちゃんっ!?!? 私たちも行くよっ!」

バツと飛び出し、スチャツと着地。

「うっ、うそお〜!?!」

2階から平次が言う。

「すっごぉ・・・」

和葉も呆然とする。

地上では、

「コナン君っ！？騎士君！？」

いきなり飛び降りてきた2人に駆け寄る。

「ど、どうしたんだよ？」

そして、また飛び降りてきた2人に驚く。

「蘭さんと青子さんまで・・・どうしたんですか？」

その問いに答えず、最初に飛び降りた2人を睨む。

「騎士、行くぞっ！！」

その2人は駆け出す。

「待ちなさいっ！」

そんな4人をポカンと見つめる3人であった。

ハア・・・ハア・・・ハア・・・

商店街を前に居る男の子2人を目指し、無我夢中に走る女子高生2人。

何度も同級生や知り合いに会い、声をかけられるが全てを無視し走る。

そして今、前の2人が顔を見合わせ止まる。

今がチャンス！とスピードを上げ、追いかける。

しかし・・・コナンがどこからか、一あの（'，'）スケボーを取り出し、2人で飛び乗る。

そのため見失ってしまった。

「ハア・・・アイツらどこ行ったんだろ？」

「うーん・・・あ・・・！！新一の家か、博士の家・・・！」

「行こっ！」

キッと行く末を睨みながら、また走り出す。

「つ、着いた・・・！」

「ココ・・・ね」

新一の家の前まで来た。

辺りを見回すと、博士の家の前で話している2人を見つけた。

「やっと、見つけたわ・・・」

「観念しなさい！」

相手もそれに気付き、

「おおっ怖えー・・・」

「やっと来たぜ・・・」

待ちくたびれたという顔をしながら博士の家に入っていくこととする。

ドアを開ける前、振り返り手招きまでする。

さっきまで逃げてたくせに次はよく分からない待遇をされ、驚く2人。

ポカンとしながらも一応着いていく。

ドアを開けると開口一番にコナンが言う。

「おい、灰原いるか？」

「何よ。・・・こんな大勢で来て・・・」

顔を覗かせた哀が4人で来たのを見て、怪訝そうな顔をする。

「いや・・・んと、バレた」

「へえ・・・って、嘘でしょう!？」

騎士がボソツと言う。

「反応遅えー・・・」

「うるさいわね・・・!まあとにかく中に入って」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2264v/>

---

2人

2011年10月9日03時53分発行